



## 国際緑化推進センターの植林活動 (2) 友好の森

林 久 晴

第2回目の本号では、平成7～12年に実施された「友好の森」事業を紹介する。

このプロジェクトは、「明日の世代に豊かな緑を残し、より良い地球環境を引き継ごう」という理念のもとに熱帯途上国の環境改善と住民生活の向上に寄与し、地球環境保全と国際親善に貢献するものとして国際緑化推進センターが企画した。日本経済新聞社の全面的な協力を得て、プロジェクト参加者を募り、表1のように15団体・社（参加者名はプロジェクト実施当時）の賛同・寄附を頂き、国際緑化推進センターが日本側のプロジェクト実施機関となって、マレーシア、インドネシア、ミャンマー、ベトナムの4カ国において4プロジェクト計1,450haの植林を実施した。

以下、各プロジェクトの概要を紹介する。

### 1. 「日本・マレーシア友好の森」

平成7年7月～12年3月の5カ年、サバ州コタ・ベルドにおいて地域の水源林造成を目的に、草地化した木材伐採跡地にアカシアマンガウム、ラタン（籐）を植栽した。

マレーシア側は、SAFODA（サバ州森林開発公社：州の再植林事業を担う組織）がカウンターパート兼作業実施機関として活動した。

事業は当初計画面積450haを平成9年までに完了する予定であったが、平成9年夏のエルニーニョによる長期異常気象が続く中で植林作業中断を余儀なくされた上、平成10年サバ州全土を襲った大火

災によってそれまでの植林地全てが焼失したため、計画を2年間延長し、360haについてアカシアマンガウムを再植林して終了した。

植林地はその後数回に亘って山火事の被害を受けており、成林した植林地の面積は不詳だが、本年2月には植林地から1,070トンの木材が生産され120RM/トン（工場着価格）で販売されたという報告を受けている。

### 2. 「日本・インドネシア友好の森」

平成8年4月～平成13年3月の5カ年間に西ヌサテンガラ州東ロンボック県プモンコン村スカロー国有林で350haの森林を造成した。

インドネシア側は林業省林業総局がカウンターパートとなりプルン・プルフタニ（造林公社）が植林活動に当たった。

ここでは、社会林業活動として貧困な地域住民の参加を得て森づくりを行うこととし、植栽樹種は木材用途のほか住民の燃材、家畜飼料用や果樹など以下の樹種を植栽した。カシュー（果実、木材）、マルバシタン（高級木材）、インドセンダン（薬用、木材）、ギンネム（燃料、飼料、木材）、タマリンド（果実、木材）、チーク（木材）、ラミン（香木、木材）などが、ha当たり1,150本の密度で植栽された。

植林は当初計画通り3年間で350ha植林されたが、前述の平成9年のエルニーニョの影響等で不成績となった177haについて、計画を2年間延長して再植林した。現存する植林地はその後の乾燥や山

表 1 「友好の森」参加団体・企業

4カ国のプロジェクトに参加： 安藤建設株式会社, ニチメン株式会社, 山崎製パン株式会社, 富士カンントリー株式会社, 日本経済新聞社
3カ国のプロジェクトに参加： イオングループ環境財団, ミネック・ラムダ株式会社
2カ国のプロジェクトに参加： 大和証券株式会社
1カ国のプロジェクトに参加： スズキ株式会社, 日本電波工業株式会社, 松下電器株式会社, 三菱自動車株式会社, 株式会社第一興商, 株式会社ホギメディカル, 株式会社ワコール

火事をまぬがれて成林している。荒廃地への植林後の動植物相の多様化や変遷の様子及び植林木のバイオマス量などが詳しく調査されている。

### 3. 日本・ミャンマー友好の森

平成9年11月～平成12年10月の3カ年間にマングレー管区ニャンウー地区キュビンウエ国有林で450haの森林を造成した。

ミャンマー側は林業省乾燥地緑化局がカウンターパート、ニャンウーバガン地区森林事務所が作業実施機関として活動した。

当該地は、年間降雨量が600mm前後の中央乾燥地帯に属し、地域住民が砂糖ヤシの樹液を煮詰めた菓子（チャカリー）を製造していて、多量の燃料を消費すること等から、植林は住民に薪炭材を供給するためのコミュニティフォレストを造成し、住民の生活の向上に資するとともに、地域環境の改善、砂漠化防止に寄与することを目的とした。

植栽樹種は、アカシアカテチュ（飼料、燃料）ビルマチーク（木材）、ビルマネムノキ（木材、燃料）、インドセンダン（薬用、木材）、タマリンド（果実、木材）などが選定され、ha当り740本が植栽された。

植林は当初計画通り3年間で450ha植林されたが、平成9年のエルニーニョにより降雨量が例年の半分以下となり、多量の植林木が枯死したため、その再植林をして平成10年に完了した。

プロジェクト活動完了後の植林地は極度の乾燥な

どで、植林木の枯死や生育不良の個所も見られるが、植林地が放牧や耕作から保護されたことによって、元々そこにあった小さな木々が植林木とともに生育し、雨季には幹線道路両側の植林地が緑のベルトを形作って地元住民のオアシスとなっている。

### 4. 日本・ベトナム友好の森

平成10年11～平成12年10月の3カ年間にハイフォン市キャット・バ島にあるキャット・バ国立公園で荒廃した森林の自然生態系回復を図るためのモデル林として200haの森林を造成した。

ベトナム側は農業・地方開発省林業開発局がカウンターパート、キャット・バ公園事務所が作業実施機関として活動した。

当該地はハイフォン市の港外50kmにあって貴重な生態系が残る石灰岩の島である。平成8年には周辺域を含めて国立公園に指定されたが、公園の中心部をなす島の中央平坦部は、不法伐採や放牧で荒れた土地であった。

このため植林は、島本来の生態系回復に寄与するために、先駆樹種としてカマバアカシアを植林後に、その樹下に在来樹種を植林する複層林仕立てとし、成長に合わせて先駆樹種であるカマバアカシアを除伐しながら在来樹種の森へと誘導するというものであった。在来樹種としては、チクラシー（センダン科）、カンラン（カンラン科）、ブラウンパイン（マキ科）、ダオ（ウルシ科）、カユプテ（フトモモ科）カマトグ（マメ科）が選定され、植栽本数は先駆樹種、在来樹種ともにha当り1,250本植栽された。

植林は、1年目は135haのカマバアカシアを植栽、2年目は既存のカマバアカシアの樹下に65haの在来樹種を植栽、3年目は1年目植栽したカマバアカシアの樹下に在来樹種135haを植栽した。

現在植林地の管理は公園事務所が行っており、当センターでは平成17年の現地調査で植林地がほぼ順調に生育していることを確認している。この種の造林は長期にわたる保育管理を要するため、ベトナム側の適切な技術的対応とともに、それを可能にする継続的な資金確保が望まれる。